



がん哲学外来メディカルカフェどあらっこ

ニュースレター

Vol.1

2017.4.1

中学生ニュースレター発行を祝して

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授 一般社団法人「がん哲学外来」理事長
樋野興夫(ひの おきお)



建国記念の日(2月11日)、「日本初!中学生が立ち上げる! Medical Café by どあらっこ」(名古屋市 みずほ在宅支援クリニックに於いて)に招待された。2017年2月9日付けの中日新聞夕刊の一面のトップに『愛知の3人「カフェ」設立;中学生ががんを癒やす 同じ悩み相談する場を』と紹介されていた。「代表は脳腫瘍、2人の母親は乳がん」と記載されていた。3人の無邪気な、真摯な姿に接し、大いに感動した。まさに、「愛は宇宙を動かし、これを支える能力である」、「いかなる時代においても真理の証明者を残す」(内村鑑三)の言葉が、鮮明に甦った。今度、定期的に関催され、また、ニュースレターの創刊も、決定された。大いなる祝福の『良きおとすれ』が、何時か、生徒に訪れることであろう。これこそ「がん教育の実践の器」となろう。NHK、中日新聞社の取材もなされた。

悩める人々へ、夢を与える『場所』であり、{『人生から期待される生き方』の学び}(主婦の友社)と「人生に答える」}の、学習の場でもある。『人間は、「人生から問いかけてられている」から「人生に答えなくてはならない」』(ビクトール・フランクル)。{『病気は人生の夏休み』(幻冬舎)~『あなたはそこにいるだけで 価値ある存在』~(KADOKAWA)}の実体験である。筆者が、若き日に熟読した矢内原忠雄の『エリヤ伝』の、『火の如く現れ、その言炬火の如く燃えたり。』が、想い出される日々である。まさに祖父の命名『ひの おきお』である。その祖父が亡くなったのは、筆者が高校生 3年の時の建国記念の日(2月11日)であった。人生は、ブーメランの如くである。

第一回がん哲学外来メディカルカフェどあらっこを開催して

〈中村航大〉

平成29年2月11日、みずほ在宅支援クリニックにて「メディカルカフェどあらっこ」を開催しました。第1回目ということで、東京から樋野先生が来てくださり、チラシや新聞記事効果で、定員以上の人が来てくれました。

今回は、人数が多かったため、3つのグループに分かれてそれぞれ話し合いましたが、同じグループ以外の人とは話すことができませんでした。僕はそれがとても残念だったので、今回は、人数をもう少し減らして、一つのテーブルを全員で囲んで、ゆったりと情報交換などできると良いと思いました。

また、今後は僕たちと同世代(中学生、高校生)で悩んでいる方にも気軽に参加してもらえるようなカフェづくりを考えていきたいと思います。

〈彦田栄和〉

がんになった人の中には暗くて失望している人もいるのかな、と思っていました。しかし当日集まった人達は明るいばかりで驚きました。色々な方と話していく中で僕はある事に気付きました。それは、自分が笑っていれば相手も笑ってくれて、周りに笑顔が広がっていくという事です。当日の会が成功したのは集まった人が皆笑顔だったからだだと思います。だから次回の会では、緊張に負けないで笑顔でいたいと思います。当日は緊張でほとんど覚えていませんが、次回からは慣れてきてもっと良い会ができると思います。次回も楽しみにしておいてください。

〈弓削響輔〉

中学生が立ち上げるメディカルカフェの意義は、何でしょう。日本初?メディアに乗りやすそう?そうではありません。中学生が立ち上げる意味は、一般の大人が開いているメディカルカフェ以上に、僕たちと同世代の人たちを巻き込んでいくことだと思います。たくさん参加して下さったときの進め方や中学生や高校生にどうやって呼びかけるかなど、今は課題でいっぱいですが、あまり悩まないタイプの僕は、それをクリアできたらどうなるか考えるだけでワクワクしています。

母親からの一言

〈中村航大母〉

今回、初開催した事により、病気で悩んでいるけど相談できる場所がないと悩んでいる患者さんやご家族の問い合わせを、実際に何件か受けました。今後は、そういう方の参加を増やし、心を少しでも楽にして帰って頂ける様なカフェにしていきたいと思えます。

〈シャチホコ記念メディカルカフェ代表 彦田かな子〉

自分たちが、役に立てる場所を探そうと活動を始めた中学生たち。彼らを支え、応援しようと雪の中、集まって下さった愛ある大人の方々。会場はあたたかい気持ちの詰まった空気でした。感動的な時間をありがとうございました。

次回の予定はこちら

<https://doarak-ko2017.wixsite.com/main/blank-2>

取材に来ていただいたNHKの方にも一言感想をいただきました。ご紹介します。

どあらっこによる、記念すべき第1回取材させていただきました。会場でカメラを回していたのですが、モニターに映る3人はそれぞれ一生懸命で、キラキラした瞳が印象的でした。その姿に益々応援したくなっています。

今後も取材を続けます!

NHK名古屋 報道部
浅岡理紗